『人文学報』第102号（2012年３月）
（京都大学人文科学研究所）

［書　評］

『コンタクト・ゾーンの人文学　第Ⅱ巻 —— Material Culture/物質文化』

〔田中雅一・稲葉穣編，京都，晃洋書房，2011年，xvii＋257頁，3,100円（税別）〕

深　田　淳太郎
（一橋大学大学院社会学研究科）

本書は2006年４月から2010年３月まで京都大学人文科学研究所で開催された研究会「コンタクト・ゾーンの人文学」における報告と，同研究所が2007年から発行している雑誌『コンタクト・ゾーン』に掲載された論文を中心に編まれた論文集シリーズの第Ⅱ巻である。第Ⅰ巻が「理論編」であるのに対し，本巻は「物質文化」をテーマとしている。

本論集のキーワードである「コンタクト・ゾーン」を，簡単に説明すれば「異なる文化背景を有する人々の接触が生じる領域」（p. ii）ということになる。だが，もちろんコンタクト・ゾーンは，あらかじめ異なるものとして区別された複数の異なる文化をもつ人々が「異文化交流」をする場という意味に限られたものではない。むしろ重要なのは，多くの他者とのさまざまな形での接触・交流を通して，ある部分で他者と異なり，またある部分では重なり合うような，「異なる文化」や「アイデンティティ」を人々が身につける過程に注目することである。編者の田中は，「人間社会や文化，そして人間性と呼ばれてきた人間の理念でさえ本来異質な他者との交流を通じて生まれてきた」（p. iii）ものではないかという問いについて考えていくためのキーワードとしてコンタクト・ゾーンを提起している。

このように，従来考えられてきた分かりやすい「異文化交流」の場ではないものとしてコンタクト・ゾーンという語を使うとなると，実に多くのものがその範疇に入ってくる。このことについて編者の田中は，コンタクト・ゾーンで接触する当事者は「だれでもいいというのではな」く（p. ii），たとえば多くの人間が身体的に接触する満員電車はあくまでも一時的な接触に過ぎないため，また母と子が長期の交流を持つ家庭も両者が文化的背景を異にしてはいないため，それぞれコンタクト・ゾーンとは呼べないと論じている。

だが何がコンタクト・ゾーンであり何がそうではないかを，あらかじめ選別する必要はないだろう。親と子の交流であっても，たとえばベイトソンの『精神の生態学』の父と娘の会話がまさにそれ自体として分裂生成的に父と娘とその読者に新しい知見を開くものであったことを考えれば，それはコンタクト・ゾーンと呼ぶにふさわしい対象になりうる。どのような場であれ，人やモノが，互いに交わり合う中でなにものかになっていくような場にはなりうるはずである。

とするならば，コンタクト・ゾーンについて論じるにあたって重要なのは，何がコンタ

クト・ゾーンであるかの見分けではないし，「これはコンタクト・ゾーンだ」と発見することでもない。そこで関わり合っている複数のアクターやモノ，視線，働きかけを一つの視点から固定的に捉えるのでなく，その場を通時的，共時的なコンタクトのプロセスの中に開いていく作業（これは観察者・書き手がその場にコンタクトするということでもある）が，コンタクト・ゾーンを有効な概念にするはずである。

ではそのようなコンタクト・ゾーンとしてモノ・物質文化を見るということはどういうことになるのか。場所や建物のようなモノであれば，そこで人々が集い交流する文字通りのコンタクト・ゾーンになりうるが，ファションや絵画，食べ物など，本論集で取り上げるモノはそれだけではない。それらのモノがコンタクト・ゾーンになるのは，それを使い，身につけ，まなざす人々の働きかけや視線が交錯する場になるという意味においてである。アパデュライが“Social life of things”(1988) で論じたように，モノはそのときどきで異なったコンテクストに位置づけられ，さまざまに意味を変える。また，それは通時的に変わりゆくだけでなく，共時的にも幾重ものまなざしや働きかけが投げかけられるコンタクト・ゾーンとして，社会的・政治的・文化的に複雑な存在になりうる。その重なり合い・絡み合いを解きほぐし，複数のコンテクストそれぞれの成り立ちや変容，相互関係を描き出すことが課題となるのだろう。

だが田中も論ずるように，モノは一方的に人間に意味付けられ，まなざされ，働きかけられるだけの受動的な存在ではない（p. xiv）。特定の働きかけ，意味づけの繰り返しの中で安定的な意味や機能を帯びているはずのモノが，それらの与えられた意味や機能を放棄し，突然異なる解釈や意味を獲得し，そこに関わっている人間に逆に変容を迫るということもまた起こりうる。そういう意味で，モノはコンタクトの場でありながら，同時にそのアクターの一つにもなる。このような不安定な二重性においてモノは極めて興味深いコンタクト・ゾーンの題材になりうると言えよう。

上記のような評者なりの見通しのもと，以下では本論集に所収されている十一編の論文を紹介する。

第一章（稲葉論文）は，十一世紀にインドへ進出したイスラム王朝の若き王子が，密かに飲酒や乱痴気騒ぎを愉しんでいた「秘密の部屋」についての論考である。この部屋の壁一面には，インド文化の影響を濃厚に受けたエロティックな男女の交合の様子が描かれていた。飲酒や偶像崇拝，卑猥な図像など，これらはいずれもイスラムの規範に背くものである。だが，であるからこそ，それを私的に愉しむことがエリートの「自己表現」になるのであると筆者は論じている。この部屋は公と私，インド文化とイスラム文化，イスラムの規範とそこからの逸脱など複数の文脈における「境界」上に位置づけられており，それらの複層的なコンタクトの微妙なバランスにおいて王子を魅了する芸術たりえていた。もちろん王子はそれを作らせた本人であるが，しかしこの部屋はいったんそのバランスを失えば王子自身を失脚に追い込むような，制御困難な力をもっていたことも筆者は指摘している。

第二章（福西論文）では，戦艦大和の 1/10 模型を展示している広島県呉市の博物館をコンタクト・ゾーンと捉え，そこでさまざまな人や展示物がどのように集まり，交流するのかを論じている。クリフォードが博物館という場を展示する側（中央）/される側（周辺）の権力関係の具現の場と捉えるのに対して，この呉市の博物館ではより平等的な交流を通して展示物が集まり，展示がなされているということ，そしてそれらの多様なアクターが少しずつ異なった見方・やり方で博物館と関わっており，そういう意味でこの博物館はコンタクト・ゾーンとしての役割を果たしていることが議論されている。クリフォードの議

論を相対化することに力点が置かれているのかもしれないが，コンタクト・ゾーンという論点からすれば「ここにもコンタクト・ゾーンがありました」的な結論に見えてしまうのは残念である。戦艦大和を復元し展示する。この亡霊を甦らせ祀るという行為は「平等」なコンタクトとしての「資料収集」なのか，そしてこの亡霊には簡単には割り切れないもっとドロドロとした要素が絡みついているのではないかといったあたりが気になった。

第三章（シュリヴァスタヴァ論文）では，前半でムンバイの中心に位置する低層住宅地区であるコタチワディにおける地域史研究プロジェクトおよび同地区を（歴史的な建築物を中心として）文化遺産として保存していこうという運動の概要が紹介される。そして後半では，都市とそれを作り出す建築技術というイデオロギーが，ムンバイを都市計画という視点から高層ビル地区とスラムに常に切り分けてきた論理とその歴史を紹介し，その二分法が「都市における収入やライフスタイルの極端な格差を目にみえる形で描写するための」(p. 64) ものに過ぎないという批判をおこなっている。実際，このような二分法からは農村的な特徴をもつコタチワディのような地区はこぼれ落ちてしまうのである。無い物ねだりをするならば，都市とスラムという分類のコンテクストの暴力的な機序を議論した後で，さらにその境界にあるコタチワディに「文化遺産」という新たなコンテクストが適応されると，既存の分類のコンテクストや諸アクターがどのように変わるのか，あるいは変わらないのかといった議論が展開されるのを読みたかった。

第四章（飯塚論文）では，ヒンドゥー寺院の司祭集団であるディークシタルの人々の住居をコンタクト・ゾーンとみなし，そこでの多様なアクターの接触/非接触を通して，カースト社会を規定する浄・不浄のイデオロギーがいかに日常生活の中で実践されているのかについて論じている。日常的にやってくる他者や毎月訪れる月経などの不浄を特定の空間に隔離するための部屋があったり，あるいは神様が通り抜けやすい形態に廊下がつくられていたりという点において，彼らの住居はそれ自体として浄・不浄を区別し生成するモノ，装置である。だが，もちろんそれだけでなく，そこに住まう人々自身も，部屋の数が足りなければカーテンで仕切ったり，あるいは時間を分けるなど使い方を工夫したり，ときには住居を新たに建て直したりとさまざまな実践をおこなう。このように本章では，他者との接触の中で自らを浄なる存在として作り出すディークシタルの人々の実践の中心に，コンタクト・ゾーンとしての住居との協働が位置づけられている様子が詳細に描き出されている。

第五章（山野論文）では，エチオピア農村部における飲酒空間をコンタクト・ゾーンとして取り上げている。昔からの慣習として労働交換のあとに皆でローカルビールを飲むという飲酒空間と比べて，今日，マーケットの一角に開かれた飲酒空間に集まってくる人々は地域や男女，宗教の違いを超えて非常にバラエティ豊かである。まさに「異文化交流」的なコンタクト・ゾーンとして飲酒空間が存在しているわけだが，ここに集まる人々が誰であるのかは，まさにこの場にいる/この場があることによって揺らぐものでもある。たとえば土着宗教の慣習的な身分階層から逃れるためにプロテスタント（基本的には飲酒が禁じられている）に改宗した男性がこの場にローカルビールを飲みに来るということは，飲酒の可否や身分階層といった単純な指標でこの二つの宗教を区別することにすでに意味が無く，相互交渉の中で今後この両者の意味づけが変わっていくことを示唆している。もちろんその中で飲酒という行為自体の意味づけも揺らいでいくのだろう。

第六章（田口論文）では，前半でインド料理がイスラム帝国の侵略やイギリスによる植民地化といった他者とのコンタクトの過程から

生成され，さらにディアスポラのインド人によるインド性の探求という再帰的な営みの中で現在あるように形成されてきたことを論じ，後半では現代アメリカを舞台とした小説の中に描かれるインド料理と家庭の関係について考察している。小説の中の在米インド人たちは，インド料理を共に食べる空間というインド的な温かい家庭の理想像を共有し大切にしながらも，同時にその重さに戸惑い，少し距離を取りたいと感じている。これは彼らの生活や家庭のあり方の変化をあらわしているとも言えるが，同時にこのようなことをわざわざ小説に描くというのもコンタクトのひとつであると考えれば，葛藤を抱えながらも自分たちの生活とインド的な共食空間の関係を何らかのかたちでつないでいこうとする姿勢を見ることもできるだろう。

第七章（安井論文）では，二つの異文化が同居している横浜市鶴見区におけるエスニックフードをコンタクト・ゾーンとして取り上げている。多くの沖縄料理店と南米料理店の存在はこの地区の多文化状況をよくあらわすものである。また近年になって料理の味付けが薄味になったり，あるいは両者が混交したフュージョン料理が登場したりという状況は，ただ複数の文化が存在するというだけでなく，人々の生活が日本に馴染んだり，あるいは二つの文化が交流したりという人々のエスニシティの変容の状況もあらわしている。だがもちろん人々のエスニック意識は料理のみに負っているわけではない。出自などのより「深い」エスニック基盤に比べれば，料理は操作可能で変わりやすく「浅い」ものとみなされることもあるという。とはいえ，料理は単に人の中にある何かを外にあらわすだけのものではなく，体内に取り込まれるものであり，それゆえエスニシティに対する強い愛着を人の中に生じさせるものでもある。このように人の外側にあって柔軟に操作可能な存在でありながら，同時に人の内側に入り込んで本質的なアイデンティティを喚起するという境界上にエスニックフードは存在するのだろう。

第八章（キート論文）は，原宿をコンタクト・ゾーンとみなし，そこでどのように人々が接触し，ファッションが生み出され，展開されているのかについて論じている。これはかつてのホコ天に見られたように，あらゆるジャンルのファッションが原宿に集まり，そこで対面的交流が行なわれることを意味しているわけではない。筆者が論じる原宿は現実の場所ではなく，いくつかのストリートファッション誌とその読者たち，そしていくつかの重要なショップの店員とそこに集まってくる人々とのコンタクトによって形作られる「想像されたコミュニティ」としての原宿である。雑誌やショップがこの象徴的な空間のヒエラルキーを形作っており，この空間での交流の中において上手く立ち振る舞い，賞賛を得ることこそが「おしゃれ」とされるのである。

このように第八章では，「おしゃれ」の文脈が原宿という象徴的な場所における象徴的なコミュニケーションによって作り出され，ある意味では閉鎖的にプレイされる様子が論じられるが，続く第九章（小野原論文）はこの原宿の「おしゃれ」がグローバルなファッションの文脈とのコンタクトの中に存在していることが論じられる。前出のファッション誌はロンドンの書店にも置かれ，イギリス人に「おしゃれな日本」を代表するものとして注目されている。また欧米のハイファッション界の中においても日本人デザイナーは高い評価を得ており，さらに近年ではアニメやマンガを通して“kawaii”という日本の価値が世界中で受け入れられつつある。筆者は，このような「おしゃれな日本」は，前章で見た原宿と同じように，すでに想像された場所としての日本になっていると言う。このことは，原宿のおしゃれをリードしていたファッション誌自体が，そもそもヨーロッパの伝統的/権威的なファッションを取り扱う雑誌であっ

たことからも分かる。海外からまなざされる「おしゃれな日本」は，前章で見たような内部でのコンタクトによってだけではなく，常にすでに欧米のファッション界とのコンタクトを通して形作られているのである。

第十章（ペナワ論文）は，日本が世界に誇る高級食材である「和牛」が，外国とのコンタクトを通して作り上げられてきた経緯について論じている。かつて日本では牛肉は「穢れ」た食べ物として忌避されており，肉食が推奨されるようになるのは外国と本格的に接触した明治期からであった。その時期から外国種の牛を異種交配のために輸入し，交配の努力の末に1960-70年代にかけて優秀な遺伝子をもつ種が完成した。こうして出来た「和牛」は当初からメディアを通して高級食材として売り出され，1991年のアメリカ産牛肉の輸入自由化以降は，「量」の輸入牛に対する「質」の和牛として，さらにその高品質を売りにするようになった。このように「和牛」は，日本と外国との常なるコンタクトの歴史の中で作り上げられてきたもので，現在私たちが高級食材としてそれを消費する文脈はそれらの複数のコンテクストの重なり合いの一番上にとりあえずあるに過ぎない。さらに第七章で見たように，食物は人間に一方的に意味づけられ消費されるだけの存在ではなく，人間の体内に入り込んでいくものでもある。そう考えれば，近年流行しているホルモンや焼き肉のような境界領域にある牛肉料理が，「和牛」の姿で消費されながら，それとは異なる形で食べる人間に何らかの作用を及ぼすこともないとは言えないだろう。

第十一章（田村論文）では，トルコ絨毯をコンタクト・ゾーンとして取り上げている。トルコ絨毯は遅くとも十五世紀以降，常に外部からの欲望のまなざしの中に存在してきたものであり，特に十九世紀中頃からはトルコに進出した西欧資本によって大量に生産・販売され，奢侈品として世界中に流通してきた。このように徹底的に外部の欲望に応えるものとして，外部とのコンタクトの中で作られてきたトルコ絨毯の中にも，商品として人気がない柄が存在するという。その人気がない白い花柄の絨毯は，二〇世紀の初頭にデザイナーとして地方の一村落にやってきたギリシャ人の男性が生み出した新しいデザインで，商品としてはあまり売れないにも関わらず，現在でも伝統的なデザインとして村の内部での使用のために作り続けられているという。もちろん花柄絨毯は商品として売れることを期待してデザインされたのだろうが，そうはならなかった。だが，そうなってもよかったはずだし，他にもそういうデザインがいくつもあるに違いない。この中の一つが現在の主流のデザインになっているということ，そして主流にならなかった花柄絨毯が消えずに現在も村の伝統として守られ続けていることは，今現在，目に見える現実の背後にいくつものそうであったかもしれない他の可能性が隠れていることに他ならない。このことはコンタクト・ゾーンにおける主体性の頼りなさと同時に，現在というものがコンタクト・ゾーンとして未来に開かれていることを示唆するものと言えよう。

以上，駆け足で十一編の論文を紹介したが，最後に全体を通しての感想を書いておく。冒頭で論じたようなコンタクトを介して主体があらわれてくるプロセスやコンタクト・ゾーンにおける主体の不確かさのような論点がよく出ていたのは，歴史的・通時的な視点から論じられていた論考であった。これは主体が「他者との交流を通じて生まれてきた」という主題自体に含まれている時間的な視点からするとある意味必然であるのかもしれない。だが共時的な視点からの議論で，主体がコンタクトのプロセスを介して形作られることを描くこともちろん不可能ではない。そのために必要なのは，人やモノの今ある状態が，特定のコンテクストの中にたまたま置かれていることによって生じているだけで，そうでなければならないわけでもし，実際にいつで

も変わりうるということを共時的なコンタクトの動態として記述することである。そのコンタクトにおいて予測不能な作用をもたらす要素としてあり得るもののひとつが，コンタクトの場を提供していた，飼い慣らしていたはずのモノの突然の反乱ではなかろうか。

最後に個人的な欲望を書いてしまったが，そこに考え至ったことを含め，本論集の各論考を読むことを通して，モノという対象を論じることの意義深さと難しさ，そしてその可能性を深く感じることができた。この物質文化につづいて，本シリーズの次巻以降，どのような論点からコンタクト・ゾーンを論じていくのかにも注目していきたい。

参照文献

Appadurai, Arjun (eds.). (1988) *The Social Life of Things : Commodities in Cultural Perspective*, Cambridge : Cambridge University Press.

ベイトソン，グレゴリー．(1990)『精神の生態学』(佐藤良明訳)，東京：思索社。